

入院の経験から

私はこれまでに二度入院したことがあります。一度は、痔の治療のためでした。痛みに耐えかねて都心のある病院に飛び込みました。

私の場合には「痔ろう」という一番ひどいやつでしたが、おかげさまで完治いたしました。術後どんな痛みが取れていくのが快感でした。看護師さんの対応も良く、救われました。

医療技術の 進歩と惑い

私と病院

これとは別に20年以上前のことですが大きな手術をしたことがあります。40歳の前厄の年で、筑波大学に勤務していた頃です。その数年前から月に1回くらい、二日酔いや疲れがひどい日の翌日に腹部や背中にも鈍い痛みがあらわれていました。近所の病院で診てもらっていましたが、症状は少しも変わらない。こんなこと一生続けたら大変だと思つて、この時期に頭のでっぺんから足の先まで徹底して検査してもらおうと筑波大学附属病院に行きました。

検査をしたら胆石症と診断されました。胆のうの中にパチンコ玉大の胆石が10いくつも詰まっています。一部は砂状になっていたらしい。「この砂が送尿管に出てきぶつかつたりすると、ショック死を起こしかねませんよ、即日入院です」なんて言われました。7時間という長い手術時間でしたが、術後の癒着も後遺症もなく、快癒しました。

てから検査が終わるまで1カ月近くかかりました。おかげで、生まれて初めて、高校野球を入場行進から最後の表彰式に至るまですべて見ることができましたけどね。

看護師さんの温かさ

入院中も、ドクターと接触する時間はわずかです。看護師さんと接する時間が長く彼女らに大変励まされ、お世話になったという印象があります。

看護師さんというのは、入院した患者にとってはドクターに勝るとも劣らない大事な使命を持っているとつくづく思いましたね。

今、経済連携協定(EPA)により看護師や介護福祉士をタイやフィリピンから受け入れるという話が進んでいます。言葉の問題や文化の違いもあって、そう簡単にはいかないでしょうね。

看護師さんが不足しているのだから外国人導入も致し方ないという考え方もありますが、やはりもっと日本の看護師さんを大事にして、給料の面でもさらに厚遇しなければならぬでしょう。大事な仕事なのに、どうして社会的地位

■わたなべ としお
【最終学歴】
慶應義塾大学大学院
経済学研究科博士課程(1970年3月)
【学位】
経済学博士(慶應義塾大学1980年)
【学位論文】
開発経済学研究—輸出と国民経済形成
【主な職歴】
1975年10月 筑波大学助教授
1980年4月 筑波大学教授
1988年4月 東京工業大学教授
2000年4月 拓殖大学国際開発学部学部長
2004年4月 拓殖大学大学院国際協力学研究所委員長
2005年4月 拓殖大学学長・大学院院長
【所属学会・協会】
第17期学術会議会員、アジア政経学会(元理事長)、国際開発学会(副会長)、国際経済学会(常任理事)、国際ビジネス研究学会(常任理事)
【研究分野・研究課題・研究活動】
アジアは第2次大戦前、欧米諸国や日本など帝国主義列強の植民地でした。大戦後アジア諸国は植民地からの政治的独立を達成し、以来現在にいたる半世紀、苦闘の開発史を経験してきました。この半世紀にわたるアジア諸国の経済発展の歴史を、統計資料をもって客観的に描きだしてみよう、というのが私の研究の課題です。そのためのデータを収集し、推計するという膨大な仕事に目下追われています。この研究は、拓殖大学国際開発研究所アジア情報センターのスタッフの全面的な協力のもとに進められています。
【著書・論文等】
『成長のアジア停滞のアジア』 東洋経済新報社、吉野作造賞、1985年
『開発経済学』 日本評論社、太平洋正秀記念賞、1986年
『西太平洋の時代』 文藝春秋、アジア太平洋賞、1989年
『Asia, Its Growth and Agony』 Hawaii University Press, 1992年
『神経症の時代』 TBSブリタニカ、開高健賞、1996年
『アジア経済の構図を読む』 日本放送出版協会、1998年
『中国経済は成功するか』 ちくま新書、1998年
『種田山頭火の死生一ぼろぼろびゆく』 文藝春秋、1999年
『私のなかのアジア』 中央公論新社、2004年。

が高くならないのかと不信感をもっている人は多いと思いますよ。

ドクターの目的は病気を治すことです。看護師さんは注射をしたり点滴を打ったりするという機能ももちろんあります。しかしそれよりも患者を励ましたり、あるいは患者の気持ちに沿うような温かい言葉の力を持っているのではないのでしょうか。

入院していて辛いときに、ほんのちよつと看護師さんに手を握られるだけで、ふつと人間としての深々とした温かさを感じさせられます。とても大事なことだと思います。

医療技術の発展の裏で

最近の医療を見ますと、緩和ケアが非常に発達しているようですね。やはり医療の本質は緩和にあると思います。病根は発見して、それを徹底的に治すことが医学であるかのようにとらえられてきました。私は果たしてそうかなと思いますね。

ホスピスも現在ではかなり一般的になりましたが、これも外国から導入されたもので日本発のもの



渡辺利夫さん

拓殖大学学長・大学院長

ではないですよ。

私は、病院というのは、非常に苦しい、あるいは痛い、辛いときに飛び込むところだという考え方をかねてより持っています。逆に言うと、痛くも辛くもないときに検査のために病院に行つて、何かの異変を探り出すということとは、自然生命体としての人間にとつては理に合わない話ではないかと思うんです。

私もそろそろ66歳になりますけど、年をとってくればやはりいろ

いろな臓器などの機能低下が起つてきて、チェックをすれば異常値が表れるのは避けられませんが、病気が老化かの区別はなかなかつきにくい。

昔の人は、検査技術なんてありませんでしたから、いわゆる異常を「年とつたな」とある種の運命として受け入れることができたと思うんです。

ところが今、MRIやCT、フアイバースコープなどの検査技術が非常に発達していますから、健

診を年に1度、多い人は2度も受ける。何らかの異常が発見されないはずはありません。

年をとれば必ず異常の頻度が上がってきます。そうすると不安が恒常化して、年1回であった健診を2回にしたり3回にしたりしないと気がすまなくなってきました。あるいは、このドクターの検査はおかしいのではないかと違って別のドクターのところに検査に行つたりというドクターショッピングを繰り返すようになります。

検査技術の発達には人間を不安に追い込んでいくメカニズムをつくり出していると考えられます。果たしてこれが、自然生命体としての人間にとってあるべき姿なのかという疑問が拭えません。私は60歳を過ぎたあたりから「ほつとけ主義」で健診を受けるのをやめました。

ただ、誤解なきように。痛い、苦しいときには病院に行きます。

昔の人は、人生を「お勤め」と考え、死ぬことを「お迎え」と考えるような人生観、死生観を持っていました。持っていたというよりも持たざるを得なかったというわけですね。

仮にがんを発見したところで治す技術がない時代においては、これは運命ですよ。運命として死を従容と受け入れるのはそんなに簡単ではないでしょうけど、いずれにしても死を受け入れる心の準備が私の両親たちの世代までははっきりとありました。だけど、今はそれがなくなつてしまつたのではないのでしょうか。検査技術の過剰な発達のせいですよ。

自然治癒力

人間は生・老・病・死のライフサイクルから逃れることは絶対できません。

私は猫が大好きで今も我が家に14歳の猫が1匹います。人間にすれば80歳とかという年齢でしょうがまだ元気です。この猫が去年の夏に4日4晩飲まず食わずで排便もせず、部屋の隅っこの自分の布団の上でひたすらうずくまつてしまつたんですよ。

もうこれはだめだと思つたんですが、医者に連れて行くなんて気は私にはまったく浮かびませんでした。

不思議なことに、5日目による

よる立ち上がつて、まず水をちよろちよると飲み始めたんです。それからほんの少し、えさを食べたリ、そんなことを2〜3回繰り返して、1週間ぐらいしたら飛び歩くように元に戻つたんですね。

「あれ？ これは何なんだろう」と思いました。免疫のメカニズムなんて私には分かりませんけれど、確かに自然生命体の中には「自然治癒力」が備わっていることを猫を見ていて思わされましたね。

人間ならば、4日飲まず食わずでいるなんていうことはまず許してくれないですよ。私が4日間寝込んだら、妻が、2日目あたりに私を病院に連れて行くに違いありません。

検査技術や医療が発達したために、人間が、自然生命体自身の持つ自然治癒力を否定しているのではないかとさえ考えます。これはちよつと言ひ過ぎかもしれませんが、真実の半分は語つているでしょうね。

「今を生きる」といついつ

私は、大正期から昭和期の初期

にかけて神経症者の治療に大変な実績を上げた精神医学者である森田正馬のことを勉強していて気がついたことが一つあります。

森田は「人間というのはどうしても過去を悔やみの心を持つて、振り返る癖がある。逆に将来に対しては不安感をもつ。神経症者というのは、過去を改悛の目を持つて振り返り、将来を不安の目を持つて見つめる人々であり、結局は今に生きることができない人々、これが神経症者なんだ」といった趣旨のことを言っています。

「今を生きる」という生き方が私は最も大切なものだと考えます。今という瞬間瞬間の連続が人生なんだと考えるべきです。今を一生懸命生きることが幸福だと森田は言っています。

彼は、書を求められると「幸福即努力。努力即幸福」と書いたそうです。努力すれば地位も上がったリお金もできて幸福になるという意味ではないんです。努力というのは、今を必死に生きるということであり、そのことが人を幸福にするということを言っているんです。

「無我夢中」という言葉が私は

好きです。仕事を一生懸命やっているとときは我がなくなつていきます。過去もなければ未来もない。あるのは今だけです。そのときは、一瞬一瞬だけが生きている。そういう生き方を日本人はずつとやってきたと私は思うんですよ。

貧しい時代にあつては、ともかく必死になつて働かなければいけませんでした。私は「勤労」という言葉に魅力を感じます。一生懸命働くことの人生の幸福を日本人は感じてきたのではないですよか。

子猫や子犬がひたすらじゃれあつている。彼らには過去や未来もありません。ただ、今があるだけです。草が、木が生い茂っている。ただ、彼らは今を生きているのでしょうか。

今、健康産業も随分もうかつているようですし、サプリメント市場も相当な活気を呈していますね。駅前のスポーツクラブなんかも見ていると、ネズミが回し車で走らされているような感じがして、私は絶対あんなことはやりたくありませんね。

(5月9日・拓殖大学学長室にて収録)